

# 特別支援学級に在籍するプラダー・ウィリー症候群の小学5年生の児童の学習意欲と自信を高めるための授業における配慮

## 1. 事例の概要

A児は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する、プラダー・ウィリー症候群の小学5年生の児童である。軽度の知的な遅れの状態と側わん症がみられる。学習面では、絵を描いたり、手紙を書いたりする活動を好む。しかし、活動の見通しを十分にもつことができないときや、急な変更があったときは、活動が停滞することがある。

本事例は、A児の学習意欲と自信を高めるための授業における配慮に関するものである。具体的には、生活単元学習の授業を例に授業における配慮を考えた。

本事例の成果は、A児が活動に見通しをもって参加し、最後まで主体的に活動を行うことができるようにするために、次のような視点から授業において配慮を行う必要があることが明確になったことである。①活動の順番がわかる手順カードを提示すること、②実際の場に近い疑似体験の場を設定すること、③正しい手順で活動できたかを確認することができる評価方法を設定することである。このような配慮を行うことで、A児は、自分がどのように活動すると良いのかを考え、取り組むことができた。

**キーワード** 手順カード、疑似体験の場の設定、評価方法の設定、プラダー・ウィリー症候群

## 2. 児童の実態

A児は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する、プラダー・ウィリー症候群の小学5年生の児童である。軽度の知的な遅れの状態と側わん症がみられる。また、発語困難もみられ、現在、言語療法を受け、発語練習を行っている。プラダー・ウィリー症候群のため、血糖値の増加により食事制限をしなければならないが、食べることに對する関心が強く、食欲をコントロールすることが難しい。

学習面では、絵を描いたり、手紙を書いたりする活動が好きで、それらに関しては継続して粘り強く取り組むことができる。しかし、どのように活動すればよいのかという見通しを十分にもつことができていないときや、急な変更があったときは、活動が停滞することがある。ひらがなを読んだり書いたりすることができる。数唱については、100以上まで数えることができるが、数を合成することについては、10以上になると困難である。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B小学校の特別支援学級では、複数の特別支援教育担当で作成した指導内容表をもとに、一人一人の児童の発達段階や障害特性に応じた指導を行っている。

【基礎1】

- B小学校では、教科担任制を一部導入している。特別支援学級においては、各教科の担当教員が全ての学級での教科指導を行うことで、児童の実態を把握し、それに適した教材の選定や教具の作成を行うことができるようになっている。【基礎2】

- 教材・教具については、指導に当たる教員が各教科等の指導内容に沿って作製し、それが個の実態に対応しているかどうか、職員間で審議してから使用するよ

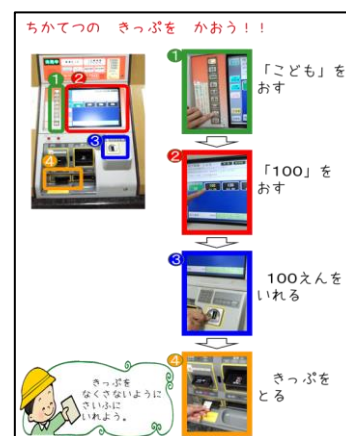
うにしている。【基礎4】

#### 4. 合意形成のプロセス

生活単元学習の授業「〇〇ゆうえんちにいこう」の後半に設定した校外学習について、保護者からA児の通学による疲れを軽減するために、校外学習で行く現地から直接帰宅させたいという申出があった。このことについて、校外学習のねらいの一つが、自分で切符を買って公共交通機関を利用し、学校まで戻ってくることであることを保護者に説明した。また、疲れを軽減するために活動量を調整して配慮することも伝えた。その結果、保護者の了承を経て、A児は、公共の交通機関を利用し、学校まで戻ってきてから下校することが決定した。このように、学習のねらいを保護者に伝え、保護者との合意形成を図ることが大切である。

#### 5. 合理的配慮の実践

- A児は、活動に見通しがもてると自分で工夫しながら活動を進めることができるため、活動に入る前には、活動の行い方に順番を付けて視覚的に手順を知らせる支援を行っている。A児は、口頭での指示を理解することには困難さがあるが、活動内容を短い言葉で順を付けて示すことや手順カード等で視覚的に示す（写真）ことで、指示されたことを理解し、活動することができる。【合理①-1-1】



写真「切符の買い方」  
手順カード

- A児に活動の見通しをもたせるために、実際の場に近い疑似体験の場を設定した。例えば、公共の交通機関の利用については、実際の券売機や改札口の写真を拡大してダンボールに貼って作成した券売機の模型を設置し、実際の場を想定しながら練習できるようにした。【合理①-1-1】
- A児が、正しく活動ができたことを実感することができるように、各活動に評価機能を設定するようにしている。例えば、公共交通機関の利用については、切符を買うときに、A児が正しく模型の券売機を操作することができたら、発券口から切符が出てくるようにした。その結果、A児は、切符が出てきたことを確認することで、活動に達成感や満足感を感じることができていた様子であった。【合理①-1-1】

#### 6. 本事例の成果と課題

本事例の成果は、A児が活動に見通しをもって参加し、主体的に活動を行うことができるようにするために、次のような視点から授業において配慮を行う必要があることが明確になったことである。①活動の順番がわかる手順カードを提示すること、②実際の場に近い体験の場を設定すること、③正しい手順で活動できたかを確認することができる評価方法を設定することである。このような配慮を行うことで、A児は、自分がどのように活動すると良いか考え、取り組むことができた。

課題としては、A児が更に社会を見据えて活動できるようにするためには、より多くの人と関わりをもたせる必要があると考える。校外における活動に参加することで、社会へと視野を広げさせ、他の児童と一緒に達成感を味わうことができるような教材開発を今後行う必要がある。